団体名	広島県	所　属	①販売推進課 ②農業技術センター	他団体等との連携	広島ゆたか農業協働組合，あづみ農業協働組合
連絡先	①販売推進担当　(082)513-3583 ②広島レモン利用促進ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾁｰﾑ（0846)45-5472				

取組事例名	「瀬戸内 広島レモン」の周年出荷に向けた体制整備支援	取組期間	平成２５年度

取組の概要　～　広島産レモンの長期貯蔵の取組支援

レモンの周年出荷に向けた体制整備を図るため，農業技術センターと連携して長期貯蔵の取組に対する支援を行い，貯蔵先の確保など次年度以降に向けた出荷体制を整備した。

取組の背景　～　年間を通じたレモンの出荷が困難

広島県は，生産量日本一のレモンの産地である強みを活かし，全国に先駆け，レモンのブランド化に向けて県内や首都圏で「瀬戸内 広島レモン」に関する広報を行ってきた。

一方，農業団体とレモンの販売に関する課題を話し合う中で，露地レモンの収穫は１０月～４月であり，需要の高まる夏季に安定的に供給できない点が，販売促進上大きな課題であるという共通認識になった。

そこで，広島県では，広島産レモンの周年安定供給の体制整備に向け，平成２５年度から，長期貯蔵の取組に対する支援を試験研究機関と連携して開始している。

１月～４月	５月～９月	１０月～１２月
⇔ 収穫可能	■収穫できない	⇔ 収穫可能

取組のねらい　～　平成２６年度からの本格的な長期貯蔵に向けた準備

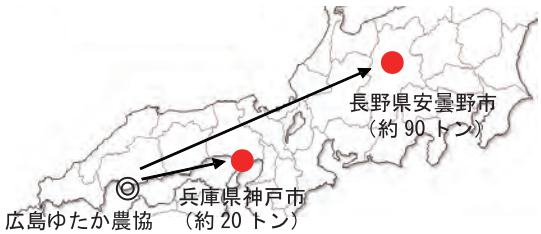
（１）レモンの長期貯蔵先の確保
（２）貯蔵中のロスを効果的に減少させる方法や貯蔵コストの検証
（３）長期貯蔵に必要な現地での作業データ等の収集

} 周年安定供給体制の確立

取組の具体的内容　～　広島ゆたか農協による長期貯蔵の取組

広島県は，平成２５年度に「広島ゆたか農協」が実施する長期貯蔵の取組に，補助金を交付する事業を実施した。

「広島ゆたか農協」は，「あづみ農協」等との連携の枠組みを構築し，この事業を活用して，４月下旬から長野県と兵庫県で合計約１１０トンのレモンを長期貯蔵しており，５月～９月にかけて出荷する予定である。



（兵庫県での貯蔵の様子）

（長野県での貯蔵の様子）

長野県の貯蔵先である「あづみ農協」（安曇野市）は信州のリンゴ産地であり，収穫したリンゴを貯蔵する冷蔵庫を所有していることから，夏に冷蔵庫に空きができる期間を利用して，今回，レモンの長期貯蔵が行われることとなった。

なお，来年度以降の実用的な貯蔵方法を検証するため，「広島ゆたか農協」と農業技術センターが連携して温度等のデータを収集している。

取組を進めていく中での課題・問題点　～　効果的な貯蔵方法の確立と，貯蔵体制の構築が必要

今回の取組は，次年度から実施する本格的な長期貯蔵の事前準備としての試験的な取組である。

従って，ビジネスとしてレモンの貯蔵を軌道に乗せるためにも，腐敗等によるロスをできるだけ減少させるため，研究機関の協力による効果的な貯蔵方法の検証が必要であった。

また，広島から遠く離れた場所で長期貯蔵を行う初めての試みであり，貯蔵先での円滑な貯蔵・出荷を可能とするため，現地作業員への作業上の指導や，貯蔵を行う際に必要な様々な手配等の確認と，コスト等のデータを収集する必要があった。

創意工夫した点　～　試験研究機関との連携，貯蔵作業等の確認

（１）貯蔵中のロスを減少させる取組

「あづみ農協」や兵庫県の貯蔵施設において，農業技術センターが温度等のデータ収集を行うとともに，３０度で７２時間の高温処理や，ヘタ除去等の様々な前処理を行ったレモンの貯蔵実験を併せて現地で実施している。

（２）貯蔵先との連携体制の構築

「広島ゆたか農協」の職員が長野県に赴き，レモンを扱ったことのない現地職員に選果方法等を指導するとともに，出荷に必要な時間など，現地の作業に必要なデータを収集した。

また，「広島ゆたか農協」と「あづみ農協」は，柑橘やりんご等の振興を目的とした産地間協定を締結し，両農協の一層の関係強化に努めている。

取組の成果（効果）　～　効果的な貯蔵方法の検証，貯蔵体制の構築

（１）効果的な貯蔵方法の検証

今回，長期貯蔵中のデータ収集と様々な前処理実験を実施することにより，研究機関の専門的な知見に基づく実用的な貯蔵方法を検証している。

（２）貯蔵先との連携体制の構築と強化

貯蔵先での「広島ゆたか農協」による指導や，現地職員がレモンの選果等の作業を経験することなどを通じて，作業レベルの向上を図ることができた。

また，今回，実際に貯蔵試験を実施することで，レモンの配送地域ごとに好適な輸送業者を確保する必要性や，選果に必要な人員や時間，「広島ゆたか農協」職員が現地で指示すべき業務内容など，作業上の課題やコスト等を明らかにすることができた。

さらに，協定の締結や貯蔵の取組を契機に両農協の信頼関係の醸成が図られ，それぞれの特産品である，みかんとりんごにレモンを加えたジュースが商品化・発売されている。

今後は，商品開発にとどまらず，幅広い分野で産地間連携を通じた，地域の活性化に期待したい。

（「あづみ農協」での選果の様子）

（両組合長と地元卸売業者が握手）

（記念発売されたジュース）

今後の展開　～　レモンの周年安定供給体制の実施

今回の試験的な取組により，次年度の本格的な長期貯蔵に向けた準備を行うことができた。

今後は，長期貯蔵の実施によって夏場の需要に対応し，周年安定供給を基本としたレモンの販売先と単価を確保し，県内のレモン産地の更なる振興を図っていきたい。

他団体へのアドバイス　～　試行の有効性

今回の事例は，県外で初めて行う長期貯蔵に向けた事前準備であったが，この取組を通じて，研究機関の協力による科学的な検証と，事前の現地での試行による課題等の洗い出しが，非常に重要であることが改めて明らかとなった。しかし，生産者団体がこうした試行を行うことは，経済的なリスクを伴うため，リスク軽減のための仕組みづくりが肝要である。